

ゆるゆるも

第拾壹卷

第九號

フレール會

第拾壹卷第九號目次

- 秋風の賦
- 一致協和
- 兒童の模倣に就て
- 遊戲上に現はれたる幼兒の模倣性
- 醫者同志で全で反對の養育法
- 玩具に就て
- 色鉛筆
- 玩具は如何に選擇すべきか
- 幼兒預所に就て
- 幼稚園の戶外運動器具

如柳子
倉橋惣三
和田實
道師如柳子
山脇春樹
若き父
高市次郎
倉橋生

フレーベル會規則

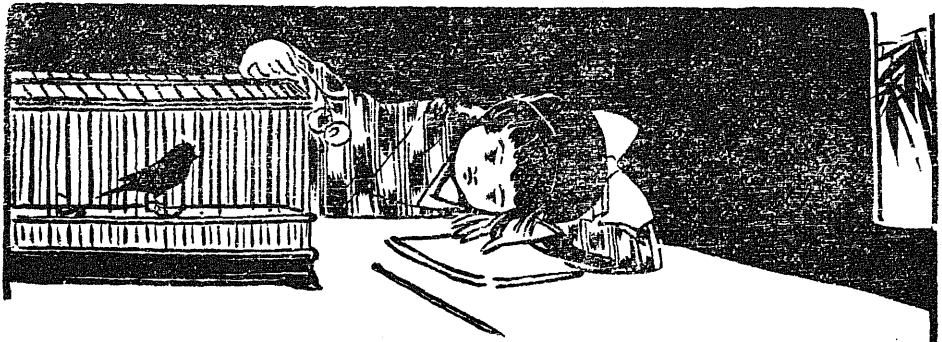
- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タルントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ贈出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
 - 一 總會 毎年四月廿一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽 會務ノ報告 幹事ノ選舉等ヲナス
 - 一 但シ會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
 - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
 - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス
 - 一 但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
 - 一 雜誌發行 毎月一同雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス
 - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 一 會長 一人 會務ヲ總理ス
 - 一 幹事 若干人 會長ヲ補助シテ會務ヲ掌理ス
 - 一 評議員 若干人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ掌理ス
 - 一 第九條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
 - 一 第十條 主幹、幹事、評議員ハ會長ノ特選トス
 - 一 第十條 本會ハ必要ニ應ジ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルルコトアルベシ
 - 一 第十一條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

購讀の申込

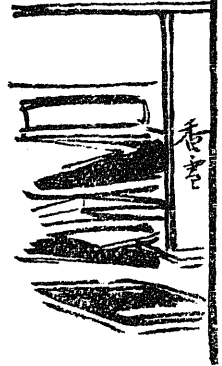
(振替口座東京 一七二六六番)

本誌を購讀なされたき方は會費一ヶ月金十錢の割合で一々年分をなまゝとめて振替貯金へ御拂込下されば直に雜誌を發送致します。

- 一册郵稅共金拾一錢
- 六册前金郵稅共六拾錢
- 郵券代用一割増
- 拾二册同金壹圓貳拾錢



第十卷第九號



如柳子

秋風の賦

如柳子

秋風来る、秋風来る、逞しかりし殘炎の一角、小笹渡るそよとの朝風
に類れて、空は青々と澄みながら、自ら清源の氣を吐き来る。單衣の
袂朝夕毎に輕きを覺えて路行く人も襟かき合さる。屋角の柿の實漸く
肥えて、眞垣の牽牛花日に小さく咲き。過る日の風雨のあと公園の萩
に残りて、錦を織りつゝ、も狼藉撩亂たる、却て趣なきにあらず、窓
に近き梅と桐、枯枝枯葉を刈り込まれて、硯の塵明かに見ゆるやうに
なり、流石に我れながら恥かしき顔を池水に寫して、鬢に點々の霜ハ
ツト驚くも今更ながら怪しき程衰へたりな。軒の風鈴切れたる短冊の
其の儘に、心にかゝる苦もなきすれ、の響を庭の竹に譲りて、誰を
憾む方もなく哀れいと深し。人の摺袂應對に扇子半ケチの煩なく
なり行くも樂しく、夕暮のせはしき儘に夜の燈に親しむ頃となりぬ
ることも嬉し。

初秋
火老金桑暑光殘

秋聲來處無尋覓

來源正好望南山

只在窓前竹葉間

俞漁溪

一致協和

— 全國幼稚園關係者の一層の親和を切望す —

忌はしく、また耻しきは人と人との小さき不和なるかな。それも我利没道の徒輩ならば識らず、語りて互に善を勵み、歌ひて共に美を唱する吾等の間に於て、若し夫れ一片、輿黨鬻際の際翳だにありといふものあらば如何。他所ごとならぬ耻しさとは斯かゝることをこそいふなるべし。先づその小心を耻ぢ、不徳を耻ぢ、而して、自己の従事せる事業の爲に、その遠大なる發達の爲に、廣く謀るの熱心の足らざるを耻づ。之れ豈已を輕侮するの最も大いなるものにあらざらんや。但し、吾輩敢て必ずしも此陰翳の所在をいふものにあらず。たゞ時あつての、一層の晴朗と和順とを憧憬嘆美するの念あるのみ。然りその念の自ら抑へて禁じ能はざるものあるのみ。友よ、暫くわが憧憬嘆美の聲をゆるせ。

教育は心なり。教へて平和親睦の徳を幼児に養はんとするもの、自ら先づ平和新睦の實なくして可ならんや。幼児の心は明鏡の如し、我が心裡一切の曇り、一つとして映せざるはあらず。出でて紛騷の巷に或は霸心を藏し、或は嫉心をつゝむもの、内に其の惡感化を幼児に與へざることを得んや。幼児教育者が總て常に一致協和の怡樂を有せざるべからざるの理、之を以て其の第一とす。世にエラ人と稱せらるゝものあり。或は縦横の術策よく風衆を禦し、或は多年の勢力よく一派の將となるものあり。吾輩成程そのエラキに服す。しかも此の人必ずしも我が愛子を托すべきの人にはあらず。世に小人なるものあり。常に他人の成功を嫉み、事毎に猜忌の妬心を藏し、或は陷擠、或は毒言、陰險なる小策を弄するを以て常性とす。此の輩、我が愛子を托すべからざるや言を俟たず。而して世の一致協和を破るもの、彼れにあらずんば

即ち之れ。彼れや僧むべく、之れや憐れむべきの差ありと雖、共に柔軟なる幼児の心性の師友たらしむべからざるや一つなり。否寧ろ斯の輩自ら其の驕慢と卑屈とを、思無邪神の如き幼児の前に耻すべきなり。吾輩常に思ふ。幼児教育者の第一の幸福は、平常親接する處の幼児によりて、眞徳の美を教へらるゝにありと、其の教へらるゝこと尠きは吾人の寡徳なるにあらずんばあらず。尙且つ吾人は常に幼児に教へて、親睦の美徳を求むるもの、人に求めて自ら其の實あらずんば、幼児に對する面目の上に、先づ慙すべしにあらざるや、寡徳か、不誠實か、識らず、實際はもう少し氣を大きくさへすれば何でもなきことなり。直に裕和のつく話なり。不協和の原因は、或は感情の衝突にもよるべし、行かゝり上の意地張とかにもよるべし。しかも要するに數に於ても事業に於ても、未だ大した複雑も大袈裟もなき我國幼児教育者の間に、事々しき朋黨呼ばはりは寧ろ滑稽の感を促す

のみ。出身の學校の異なるが何程のことぞや。官私とやらの別が何程のことぞや。我國人と外人との相違が何程のことぞや。箱根の關の西と東とが何程のことぞや。日々相手にする幼児こそ小さくとも。吾人の心膽はもう少し潤く大きくして可なるべきものなり。

三

保育上の説を異にするによつて、研究的に相對峙するは、吾輩の寧ろ大に賛成する處なり。若し其の誠意幼児教育の發達の爲にありとならば、假りに幼稚園教育反對論と雖も吾輩の謹で傾聽する處なり。しかも斯くの如きは必ず常に學理上の争ひならざるべからず。研究上の對峙ならざるべからず。而して既に學理上、研究上の争ひなりとせば、其の争ひの第一要件は兩者心懷の虚淡と靜平と、眞理の前にする謙遜とを缺くことあるべからず。何事にかゝはらず。世上説を立つるもの、往々にして自説の主張と、我心の主張との別を混

するもの多きは、傍觀者をして眉をひそめしむるものなり。吾輩亦此の過ちに陥るべからず。自信の強きは可なり。しかも其自信は、平然として他を聴き得る程に強きものならざるべからず。塞を守つて辛じて敵襲を防ぐものは、未だ必ずしも強き城塞にあらざるなり。況んや、幼兒教育の原理方法、その根本に於て、枝葉に於て、吾輩をして正直にいはしむれば、未だ悉く研究中の事項といふも可なるべきのみなるを、此の間、誰れか不動確乎の權威を主張し得るものぞ。誠實なる學者は、其の説を語るや常に研究の俎の上に於てす、他に一層銳利なる調理師あつて、より細かなる解剖と批評とを與へらるゝを期望す。布に包み箱に納めて、そのまゝに珍藏せられんことを希ふものにあらざるなり。我が幼兒教育に就て説を立つるもの、必ずまた此の學者の眞率と誠實とを有せられんことを希ふ。君が研鑽の深きを危ぶむにあらず。君が經驗の乏しきを疑ふにあらず。た

い、より大いなる敬意を、君が永久虚坦なる研究的態度の前に獻せんことを希ふなり。而して吾國幼兒教育の業が、屑々たる自説の立て合ひをして已みけん程の閑事業ならば識らず。今は非常なる研究努力奮闘を要すべきの時なること、吾人の總てよく知る處にあらすや。尙且つその研究努力の範圍の諸般なる、到底一人少數の熱心者に委すべきものにあらざるも、吾人のよく知る處にあらずや。我國幼兒教育關係者の一層の一致協和を要するの理の第二は、即ち此の協力研鑽一致努力の必要にあり所謂熱心のみあつて研究心なきものは、必ずや頑固偏執に陥るを免れず。吾人常に深く警むべきを思ふ。

勝たば怨をうけつべし

伏なば心安からじ

勝と伏とを捨る身の

無瞋の如來を辱かしめ

無垢の聖者罵るも

風に逆ふ塵の如

かへりて己が身を汚す。

兒童の模倣に就て

文學士 倉橋 惣三

一 模倣の種類

兒童の模倣性は暗示性と共に、兒童と外圍との關係を結ぶ重要な作用である。模倣の種類に就ては、見方によつて色々の分け方が出来る。或は意志的要素の有無によつて分類して、有意的模倣、無意的模倣といふ名をつけることも出来る。或は又其の模倣活動の反復の有無によつて一時性及び永續性の別を立てることも出来る。素より同じものを違つた方面から見た丈けであつて、いづれを正しとし、いづれを誤りとすべきものではないが、茲には發達の順序といふ見地から次の如き種類に分けて見る。

一 反射的模倣 兒童に於て最も早くあらはるゝ模倣活動は、未だ明確なる意識を先立てずに行はるゝものであつて、之れを反射的模倣といふ。即

ち兒童自らに模倣しようといふ意志があるのではなく、只外圍のまゝを模倣するのである。尙心理學的にいへば、外圍からの刺激が兒童の感覺を通じて兒童に印象を與へると、其の刺激と同じ種類の運動が反射的に行はるゝのである。元來被暗示性から模倣性に遷つて行く限界については、種々考究を要すべき問題があるのであつて、此の反射的模倣と稱する處のものも、考へ方によつては被暗示活動に他ならぬのである。處で、之れを模倣の部に入れるか、被暗示活動の部に入れるか、その議論は暫く措いて、兎に角、斯くの如き事實が幼兒に於て多く行はれる。而して發達的研究からいへば、之れが總ての模倣の始めをなして居るのである。

二 自發的模倣 次に、此の無意的な模倣性が、兒童の意志の發達に伴ふて、次第に有意的模倣になる。併し、單に有意的といふ一つの名稱を以てあらはして仕舞ふのは、吾々成人の場合のことで

あつて、發達の級階を追ふ兒童の場合に於ては同じ有意的なるにも、いろいろの種類の存すべきことを忘れてはならぬ。即ち反射模倣の次に來るものは、單なる反射といふに比しては有意的であるが、しかも、其の個々の模倣活動が未だ明確なる目的活動とはなつて居ない處のもので、只見たまゝ、聞いたまゝをそのまゝ、其の通り、何故模倣するかといふ譯はなく、模倣そのことが興味となつて模倣するのである。即ち眞の有志的模倣と純反射的なものととの中間に位するものである。而して之れを反射的模倣に對して、自發的模倣と名づける。俗に所謂猿がよく人眞似をするといふ其の模倣は此種に屬するものである。又普通いふ處の、兒童が模倣性に富んで居るといふのも主として此の意味に於ての模倣である。即ち其の動作の表面若しくは結果に於ては吾々成人の模倣と同じであるが、其の心理的性質に於ては異つて居ることを注意しなければならぬ。模倣作用を一般に

本能として論ずることの可否に就ては多少の疑點もないではないが、多くの人々が模倣を本能だといふのは茲にいふ自發模倣を見ていふのである。即ち本能的だといはれたる程、無目的性のものである。

三 戲曲的模倣 之れと無目的性に於て同一にして、表出の形式に於て異なるものに戲曲的模倣といふものがある多くの兒童心理學に於て、此の事實を戲曲本能と稱されて居る程自發性に富んだもの又は無目的性なるものである。而して、普通の自發模倣と異なる處は、自發模倣が、其のまゝの模倣であるに對して、之れは變更を加へたる模倣である。即ち見た處聞いた處に、分解と構成との兩作用が加へられて、即ち戲曲的表出がせられるのである。

四 有目的模倣 以上、自發的戲曲的兩模倣は、兒童が其の模倣の手本となる處のものに注意するといふ點に於て意志作用を先だてゝ居るのである

が、更に、一つの目的が先きになつて、其の目的の爲に模倣作用をすることがある。吾人成人の場合に於ける模倣は多く之れであるが、兒童に於て、此種の模倣があらはれるのは稍長じてからのことである。之れを有目的模倣と名づける。

有目的模倣が其の目的に應じて分解、構成の作用を加ふことは、其の性質上明かなことである。して見ると模倣も此の種のものに至つてはたゞ手本を寫すといふことは違つて来る、即ち意志を用ゐて、自己に必要な手本を外圍から撰擇採用することになる。之れを模倣の撰擇性と名づけ度い。處が模倣の撰擇性なるものは、此の有目的模倣に於て最も著しく行はれ明かに分かることであるが、尙ほ細かに考へて見ると、自發的模倣に於ても矢張り存することである。普通、自發的模倣に就ては、兒童が外圍の刺激をそのまゝに何でも模倣するとはいふものの、之れは實は粗い見方であつて、一個の生物が外圍に適應する場合には

常に其の生物特有の適應をするのが自然である。即ち兒童が如何になんでも模倣すると見えても、實は、それらの兒童に特殊なる模倣をして居るのである。たゞ、そのことが兒童自らの意識作用ではない爲に、有目的模倣の場合の如く、格段なる現象でない丈けである。

二、模倣に對する教育上の注意

以上、兒童の模倣性の種類に就て心理的の説明を試みた後に、此くの如き見地に基く教育上の注意を考究しなければならぬ、但し兒童は模倣性に富んだものである。故に悪き模倣をさせぬ様に彼等の外圍を注意しなければならぬといふことは、勿論必要の注意であるが餘りに知れ切つたことである。再び此種の論を繰り返へす必要もあるまい。併し、此事は理論としては陳腐乃至平凡であるが、事實としては中々困難のことである。そこで、其の困難の結果どうなるかといふと模倣に對する此の積極的注意が、反對に消極的實行と變轉するこ

とが多い。即ち善き外圍を供するといふことが、容易に理想的に實行され難い處から、吾人の實際は禁止の方法に轉するのである。即ち兒童は模倣性に富んだものである。依つて之れをよく取締つて禁じなければならぬといふ全く消極的方法に陷るのである。

之れは成程實際に於ては已を得ぬことである。少くも或る程度までは已むを得ぬことである。併し、此實際上に於ける已むを得ないといふ承認が理論上の領域にまで侵入し來つて、兒童の模倣性といへば、只ひたすらに其の取締法のみを考究し又論議するの風あるは甚だ遺憾なことである。即ち吾人は、此の豊富なる兒童の模倣性に就て、單に警戒の方面にのみを思はず、其の價値の論を——是亦單に模倣性の必要といふ漠然たる説のみでなく、其眞價の果して眞に那邊にあるやの研究をしなければならぬと思ふのである。そこで模倣性の教育的注意は二つに分れる。一つは手本に關する

取扱ひであつて、一つは模倣そのものに關する注意である。前者は之れを一般に用ゐられて居る言葉でいへば、兒童に何を模倣さすべきかといふ外圍に關する注意である。處で、いふ迄もなく此の注意は大切である。極めて大分ではあるが此の種の論は、常に模倣の結果にのみ重きを置き過ぎて居る。而して此の他にもう一つ大切な模倣の作用の存することを忘れ勝ちである。悪いことを模倣しては悪いといふのは、いはゞ當り前へのことである。則ち、吾人の特に茲に注意を促し度いのは、此の模倣の作用の方面に就てである。而して此方面に關しては、尙ほ將來の研究を要すべき點が少くないが、その中二三の注意を擧て見れば。

第一、模倣の眞價 模倣の眞價は單にその結果の善惡にあらずして、其の活動それ自身にあるといふことである。殊に一時的の、其時限りの模倣でなくて、多少なり永續性を有する模倣の場合に於て尙ほそうである。即ち模倣の仕上げ如何よりも、

仕上げの途中、即ち経過に於て價值がある。兒童の模倣の際に於ける反復の如きは、成人の目から見ればくだらない繰りかへしに過ぎないものが多い。殊に同じことを幾度も繰り返へすの單調を感じる次第であるが、兒童に於ては、その外見單調なる、くだらない繰り返へしの中に熱心なる工夫があり努力がある。殊に有目的模倣、戯曲模倣に於ては分解、構成の作用を要すること、その活動の経過に於て兒童の精神の發達がある。従つて、第二、模倣と獨創力との關係 第二には模倣と獨創力との關係に就ての論が起る。從來模倣の價値に就て充分積極的の意見を有して居る人々でも、模倣性の發達が獨創力を害することを言ふ人が多い。成程、専ら外の手本にのみ依從する模倣と獨創力とは反對のこの様であるが、併し、前途の如く模倣に關する注意が其の結果のみに限らずして、模倣中の作用に着眼せられる場合には、此心配は必ずしも事實でないのみならず、却つて模

倣作用の發達の間に、實は一種の獨創の養成がなされつゝある譯なのである。蓋し、前から述ぶる通り、模倣は單に個性が外圍から支配されるのみの現象ではなくて、個性が主となつて外圍を選擇、採取する活動なのである。即ち兒童模倣性の教育が單に外圍の顧慮のみから離れて、其の作用の教育に移る時に、獨創力と發達と何等矛盾なきことになるのである。

第三、戯曲模倣の利用 第三には之れとは少し別のことで、教育の實際に關して希望し度いことは、戯曲模倣の利用である。元來一般に模倣は、外圍の事物を反復して充分の理解と、固き記憶とを起させるに効果あるものであるが、戯曲模倣に於て殊に此の効果が大きい。單に目から見、耳から見るといふ外に、之れを模倣して所作するといふ處に、理解を助け記憶を増すの效果あると言迄もない。而して、此の模倣性を如何にして教育上に利用すべきかに就ては、種々實際上の考慮工夫を要する

ことであるが、幼稚園の遊戲的保育に於て、之れが多少利用されて居る如く、小學校殊に其の初級に於ては、學課の種類によつて此の利用必ずしも困難でないと思ふ。但し、戯曲模倣とは必ずしも兒童に芝居をさすといふことではない。最も廣く之れを定義すれば、知覺によりて得たる處を構成的に實行するといふことである。遊戲的に、兒童自ら種々の模倣的動作をさせることも有益であらうし、又箱庭、「サンドアツプ」の如き構造製作をさせることも有益であらう。

此他、兒童の模倣に就き注意すべきことは限りなく多いであらう。併し、吾人の特に茲に繰りかへして注意し度いことは、教育上、模倣性の研究を。たゞに外から兒童に作用する外圍の問題に限らないで、兒童精神發達に重要な一つの内的活動として、之を如何に益々發達せしむべきか（取締るのみでなく）、又教育上如何に利用すべきか（警戒するのみでなく）の方面に進め度いことである。

遊戲上に現はれたる 幼兒の模倣性

和田 實

一〇

物真似をすると云ふことは、何も幼兒に限つたことではないけれども、真似の由つて來る取を採り模倣の心理を研究する爲めには、幼兒の模倣的行爲を観察することは最も適當なことである。殊に幼兒の自發自由なる其遊戲的活動に就いて之れを観察するときは一層其真相を理解するに都合がよい。そこで別段まとまつた意見とてはないけれども、氣の付きたるまゝの事實に就いて二三記述して見やうと思ふ。

一、最初の模倣（直覺的）

由來幼兒の物真似と云ふものは、随分早くから現はれるものである。若し見る人があるならば生れて數週間の後には既に其萌芽の出現を見るに相違ない。ブライエル氏は生後十日ばかりの時に口

先を尖がらすことを真似させたと云ふのである。併し幼児の模倣が素人目にも能く判る様になつて来るのは、生後数月の後である。余の長男の例に因つて見ても、其明に模倣であるなと認めらる様になつたのは、生後の四ヶ月であつた。諸家の記録に因つて見ても、大凡そ此頃から、誰にも判る様な物真似を初めて、漸次其行動を複雑にし、一年の終頃となつて一層其種類を増加する様である。且此頃になると、其模倣の心理は餘程複雑の度を加へて居る、故に是迄を第一期の模倣時代とすれば、是以後のは第二期の模倣とでも云はねばなるまいと思ふ。何故と云ふに、是迄の模倣と云ふものは、主として直観を其儘反射的に繰返すと云ふことが普通であつて、母親が障子をはいた夫れが面白いとて真似をしたり、父親が風鈴に手を觸れて鳴らしたのが氣に入つたとて自ら之を繰り返したり、或は工場の汽笛を聞いて、靜かなうなり聞を出して其に和して見たり、或は騎馬の人を

見て抱かれたるまゝに兩足を踏ん張つて躍り上つたりする様な類である。生後一年間の模倣と云ふものは概ね此外に出ることがない。尤も茲に注意して置かねばならぬことは、所謂第一期の模倣と云ふものが反射的であるからと云ふて、生後唯始めて経験したる事に對して、直接之を反復して遊び得るものでない。幼児が後には進んで模倣しやうとする類のものも、初めて夫れに出會はした時には、未だ容易に手をば出さない。そして少くも一二回、多きは數回の間、唯熱心に之を凝視して其の活動を觀察する此觀察が稍進歩して興味益々充進するといふことになる、次には機會あり次第に愈之れを實行する様になるものである。尤も時に或は全く無經驗の事項に會して唯一度で直に之れを模倣することがないではない。例へば父親の買つて來た土産の喇叭を見、唯一回鳴して聞かされた丈で直きに之を取て吹かんと試みる様なのは之である。が、併し、斯る場合でも能く調

べて見ると、其動作が其彼自身の既に爲し能ふ所のもので、模範を見ると云ふことでは初めてはあがあるが、實行と云ふことは決して初めてではないことが知れる。即ち幼兒の模倣と云ふものは、一番最初に模範を示してから、少くも數回反復の後でなければ之れを實行せしむる迄には至らぬものである。此の點から考へても四五才の幼兒を捕へて、唯一回だけ模範を示すことに困つて直に之れを實行させ様とすることは、思はざるの甚たしきものであると云ふことが出来る。故に高いくを教ゆるにしてもチヨチノを教ゆるにしても、初めてから教へ様と云ふ考で掛つては、ツイ性急になつて子供に無理をする場合が多い。けれども單に斯る動作を示して幼兒の觀察的興味を満足せしむるを以て目的とすると云ふ風になれば、數日數十日の後には譯もなく實行し得て、極めて愉快氣に活動するのである。従つて此直覺的模倣時代に於ては或動作とか或活動とか云ふ類のものを幼

兒に教ゆると云ふことは無論目的とすることは出来ぬ。唯善き模範を示し善き活動を示して、内界の空隙を充して置と云ふ覺悟でなければならぬ。

二、聯想的模倣

直觀を即時に其儘反復するとも、漸次に複雑の度を加へて來ると共に一方にはまた時間の上に伸長を加へて來る。直覺的模倣の特長は現在の直觀を反復するのであるが、幼兒の觀念が聯想的活動を爲し能ふ様になると共に一刺激に伴ふ聯想を得る、此聯想されたるものを實現して模倣する様になる之が余の所謂聯想的模倣である。幼兒の満一年に達せんとする頃ともなれば「オウマ」と云ふ名辭を聞くと共に兩足を踏張つて「ハイ／＼」の眞似をなし、或は玩具の犬に己の手にせる菓子と與へんとするが如きは此類例で、幼兒の模倣が第一期より第二期のものたらんとする中間の架橋たるものである。

三、記憶的模倣

過去の記憶を再現して、其觀念の内容を實現せんとするので、幼兒の模倣的行動の第二期を占むるものである。其等しく聯想の結果に過ぎぬものである所からして、分類上から云へば、前記の聯想的模倣のうちへ包含せしむるか、或は前者を此記憶的模倣の中に入るゝか、何れ學者に因ていろ／＼に取扱はれるには相違ないが、實際に幼兒を観察して見ると一概に一樣視することは出来ぬ。此種類の模倣は之を前の聯想的模倣に比するときは、一層其複雑の度を異にして居る。一例を上げて見れば、余の長男は一年二月の頃、次の様な事實を其の養育日記中に残して居る。曰く、

「父の出勤後脱ぎ行かれしチヨツキを母の片付けんとせしを見て、それを着させよとて頻にチヨツキを見ては自分の肩を指す。之を着させれば、頓て又傍にありし、同じ父の胴着を着させよと云ふ。之をも着せしに、今度は上に掛りし父の襟巻をよこせと云ふ之をも首に巻き

遣りたれば、いと満足げにニコ／＼と笑みつゝ、座敷中を歩き回はり、果ては好きなる喇叭を持ち出して、得意氣に吹きて行く、其姿の無邪氣にて愛らしく面白きには覺えず失笑。

是は前の單に名辭に因りて其ものゝ活動を聯想したり、玩具の犬を實物扱にしたる。犬の模倣に比しては、餘程複雑したるものである。而して其種の模倣的遊戲は其分量に於ては非常に多い。通常人の云ふ幼兒の模倣と云ふのは、主として此類のものである。即ち日頃經驗する所の一團の觀念を思ひ起して更に、是を茲に實現せんとするので、此種の模倣は幼兒の二歳頃より始まつて三、四、五、六歳の頃には最も盛んに現はれる。勿論夫れから後に於ても決して全體の模倣力が衰へると云ふ譯ではないが、此時代に於て主として人の日常行爲の大部分を模倣し盡くすが故に、見る人をして如何にも幼兒と云ふものは眼を皿の様にして大人の行爲を注意し、以て模模の材料を漁らんとし

て居るかの様に思はれるのである。實際此時代の
 幼兒と云ふものは、其筋肉の發達も漸次に精緻を
 加へて、活動は随分巧妙となつて居るのであるが、
 唯不足なのは活動の形式である。然るに大人は長
 年の經驗に因つて種々なる活動の形式を有して居
 る。故に幼兒が此形式中に自己の知らざる新奇な
 ものを發見するや、得たり賢しと之を模倣して其
 活動感を満足せしめて居るのである。斯様にし
 て幼兒の眼が絶えず大人の行動に注がれる故に、
 時に大人の不注意の影を遠慮なく寫し出して、人
 をして喫驚せしむることがある。

或人の女の四歳になるは、父親が常に寢ころび
 て新聞を見るのを見て彼女が新聞を見ときは、必
 す寢ころぶので困つたと云ふことである。余が親
 戚の六歳の男兒は其父が食事をしながら新聞を見
 る癖を眞似て、食事と云ふと能く新聞を持ち出し
 て來て、傍に置いたことがあつた。幼稚園など
 を參觀して見ると、何處の幼稚園でも砂糖屋遊び、

まいごと遊び、其他電車ごっこ、汽車ごっこ、さて
 は軍ごっこ、學校ごっこなどの絶えないのは素張
 らしいことである。嘗て市内の某幼稚園で一ヶ月
 間の幼兒の自由遊びを調べたのを見たのに、悉く
 皆是れ八百屋遊び、魚屋遊び、軍ごっこ、電車ごっこ
 等の模倣遊戲であつたのには實に驚いた。殊に其
 中に泥棒ごっこ、泥酔ごっこ、喧嘩ごっこなどと
 の等しく列擧されてあつたのは尠からず驚かされ
 た。是は極端な例で幼兒が一ヶ月間の長きに亘つ
 て模倣遊戲の外他の自由遊びを探らぬと言ふことは、
 少く其保育法の上に何等かの缺點の存するに非ざ
 るかの疑念を挾きまざるを得ぬ次第ではあるが。
 然も幼兒が根能く單に模倣遊戲を續け行つて満足
 して居ると云ふのを見ても、如何に此時代に於て
 模倣遊戲が盛んであるかい判る。従つて此時代の
 模倣遊戲の内容は、随分多方面に亘つて居る。まゝ、
 ごとやおばさんごっこ、如き家庭的行事があり、
 電車、汽車、八百屋、砂糖屋、大工、左官等有ゆ

職業的内容があり。祭禮、葬式、樂隊、廣告等の社會的出來事があり、ウオーターシューント活動寫真等の興業物があり、其他千種萬樣殆んど限りが無い。幼兒は是等限りなき材料に因つて、其身心の活動を限りなく多方面に練習しつゝあるのである。殊に砂や粘土を以てする模倣的土工作業の如きは、幼兒の發達上最も尊む可き筋のものである。斯様にして此種の遊戲が盛に行はるゝ様になれば、幼兒の模倣力は大なる發達を受けて、次には教師の教へんと欲する事項を容易に且速に之を傳授することが出来る。否、子供は教師の教ゆる所のものを速に且容易に之を模倣すること出来る様になるものである。

四、構想的模倣

幼兒の記憶的模倣が盛んに行はれて、心身が稍多方面に練習せられた曉になると、最早現實的な事實の再現的模倣を遣つて居つたのでは、生理的活動欲の上には兎も角、尠くも心意上には不

足を感じて来る。茲に於てか更に現はれるものは、此構想的模倣である。構想的模倣と云ふのは、現實ならざる想像觀念の實現である。即ち想像したる事實を現實に模倣するので、或はお伽話を聞きて、其内容を其まゝ、眞似る所の芝居じみた行為、若しくはお醫者遊び家庭遊びなど云ふ記憶的模倣の想像に因りて一層まとまりたる形となりたるものを云ふのである。故に此種の遊戲の發達の極は、遂には純然たる演劇にまで達せずには居られぬ。従つて、或は果して幼兒乃至兒童に遊戲として許す可きものであらうか否かを疑ふものさへある。勿論純然たる劇となりたるものに就いては、今茲に論ずる限りではないけれども、夫れ程迄に至らぬ遊戲たる以上は別段禁止するの必要を認めぬ、否寧ろ或點迄は他の遊戲同様充分教育上に利用することの出来るものである。又幼兒の側から見ても、此程の遊戲を絶対に禁止するが如きは壓制の事と云はざるを得ぬ。吾人の經驗する所に因

れば、幼児七歳に達すれば男児は軍ごつこ、女児は社交遊びをなさずでは居られぬものである。彼の下層社會の子供の中に泥棒ごつこの絶えぬも、軍ごつこ同様未経験の場合を構想して之を模倣することの興味が之を助け居るや疑ひない。斯様にして男女共にお伽話を芝居にしたる如きこと、(所謂お伽芝居にあらず)を實演するの興味は、何人にも存するものである。吾人は之を教育上に利用して、幼児の興味を満足せしめて、高尚なる趣味を養成すると共に、幼児の模倣力をして、單に現實的直觀的のみ捕はれずして、深く無形的概念的活動をも理解し模倣し得しめんと欲するものである云ふ迄もなく、之が實行の方法に至つては、種々なる方面に向つて其弊害を生ぜざる様注意するの必要がある。其注意の仕方等に就いては多少の考もないではないが、少し問題外になるから又の時を期するとしやう。

以上は幼児に現はれ来る模倣的行動の主要であ

る。尙實際の統計やら具體的遊戲の實例やらを列挙することも大に必要ではあらうと思ふけれど餘り管々しいから御免しを蒙ることに致しませう。

フレーベル館主嘆じて曰く

某校の生徒歸路弊館に立ち寄り玩具を取り出していぢること常なり或る日例の如く尋常一年の兒童五六人來りて劔と鐵砲とを出し或は大將だとか或は少佐だとかとてふざけ居たり余亦庭に下りて其の相手をするに數分偶々陸軍少將偕行社よりの歸途愛孫の土産を求めんとて靴音高く入り來らる。

一人兒童「おやほんとの大將がこられたよ」と云ふや否や人は姿勢を直し舉手注目禮をしたそれで外の子もども亦之に倣ふて一同敬禮をしてそして劔を帶べる一兒は忽ち之を抜きて指揮の姿勢を取るや否や「前へ進め」と號令をかけた其の聲や頗る勇大であつた而して曰く「大將甘いかネ」と陸軍少將は笑はざらんと欲するも能はざる面地で微笑を堪えながら「リ、甘い」其間に一人の兒は少將の側に行きて劔を比べ「やはり大將の劔が立派ネ」とやつたすると少將は其の子の頭を撫でた、其の内「大將をからかつたりなんがするとひどいぞ歸る」と云ふものが出來た、皆揃つて「歸る」と又一同「失敬」と云ひながら舉手して弊館を出た少將は其の後姿を見送つて居つたが群兒は川上大將の銅像の方に走つて行つた。

頓がて少將は頭を傾け「まだおれをからがつた子供はない、某校の騎け方には一風違ふ所があるわい。何う云ふ風にやるか知らん、あの下に一人位は大將も出るだらうよ」と大變に賞讃された之を見て居つた我輩も實に氣持がよかつた。とは館主が贅嘆の言葉である。

醫者同志で全で反對の養育法

戸 倉 生

我々は教育といふことに就ては話分るが、養育といふ方に就ては、實は分らないのである。養育といへば今更説明は要らぬのであるが、ザツト先づ幼稚園時代の兒女を指すのであらうと思ふ。現實をいへば生れてから、親の膝を嚙らぬに至るまでも含まれることもあらうが、予は、ズツト廣く見て生れてから小學校時代の終りまでとして述べて見たいと思ふのである。

それで養育といふことになる、單に自分の考で納りの行かぬことがあるので、ある醫者さまの考を問ふといふことになるのであるが、茲に予は實例を擧げて一問題を提供して見やうと思ふ。有體にいへば予は多くの小供を有しながら兒童養育の主義を一定することの出來ぬ育兒なしであるからである。

予の知己に兄弟共に醫者なのがある。兄は内科婦人科を兼ねて、弟は外科専門の博士である。兄は十五を頭に五人ばかりの兄弟があり、末に二歳の幼兒がある。弟には十八を頭に、これも五人の子持ちで七歳が一番小さいのである、然るに同じ醫者でありながら二人の養育法、廣くいつて或は教育法が全然反對であるから面白い。

兄の子の方は寒い時に外出し、暑い時に日光に射られてもかまはぬ、加之水泳ぎ水いたづらをすれば、火の爲めに焼くをすることもある。棒切れを持つてあばれ廻れば、勿論喧嘩もする、巫山戯もする。能く笑つて見たり、怒つたりすることがある。轉ぶ倒れる粗忽をする。隨て中々多辯で誰にも話を仕掛け、誰から問はれてもハキ／＼と答へる。母親は五六歳の幼童幼女に使ひ歩きをさせる。家柄は可成り立派でも、髪の毛はボサ／＼して鼻を垂らしながら前垂に焼芋を買つて歸るところを予も予の妻も度々見た、然も女中は三人も居るの

である。斯の如き有様であるから食物の如きも敢て下女といはず、勿論上るもの結構であらうが、輕子車引きが舌鼓を鳴らすやうな、俗に所謂豆餅でも鐵砲巻でも、南京豆でも鹽煎餅でもバリ／＼ポリ／＼噛るのである。されど敢て人に向ては無禮なことはせぬ。挨拶應對などは生意氣に利巧にやる。言など飽く迄社交的で、然も意志が強い、一寸のことで泣くやうなことがなく、恐れることもないのである。この風が今いふ十五を頭に四つ位の兒迄同じ形式でゆくのである。

この子にして此親ありといへば反對かしらねど、父親のいふには、どうも小供は大事にしてはいけぬ。大事にすればするほど弱くなる。冬、風でも揚げて夢中の中は水鼻を垂らし泣顔をしながら平氣で居るし、夏、水で遊ぶときは女の子でも眞裸體で天日に照らされながら、水の中でボチャ／＼やつてケロリとして居る。結構丈夫である。それ此の暑氣に中てゝはいけぬ、室内を六十度に保て、

日射病にかゝるから、外出するには、必ず帽子を冠つて傘を挿せといふやうに庇つては小供は弱くなるばかり、又下等社會で通食とする堅いものでも、まずいものでも十分消化するやうに腸胃を鍛練せねばならぬから、努めて此の方針を取る。身體ばかりではない。精神上のことも、色々の刺激を興へて、少し位の事にはびくともせぬ魂を養つて置く。學說とか秩序とかに齷齪して居るものほど弱いから、自ら日頃の方針で小供を養育して居る。誠にキビ／＼して居て心持がよいと思ふが、弟の方は全で違つて居るから面白いといふ譯である。

扱て弟の博士、先生の方でいふと、これは又飽く迄神聖である。先づ飲食物の注意は柔きもの滋養物を撰で、夏さ寒さの衣物の注意に女中連之に任じ、出入の靴傘の用意まで毫も子供の手を下すところはない。現に此の如しであるから、精神上のこと、即ち學問勉強の仕方も靜寂を旨とし、教

師に對しても口を聞くことをよくせぬ。他人が十
言いふ中に一言も六かしい。隨て物事に恐れと疑
ひとを懷き、少しもハキ／＼せぬ。されど頭腦は
悪いのではない、性質は飽く迄温良である。俗に
いふ内氣一方甚しきは十五にもなる男の子が涙を
ホロ／＼こぼすのである。氣の弱いと夥しい。父
親なる博士の曰く小供の養育は靜かに柔かにせね
ばならぬ。小言などを滅多にいふとも出來ねば勿
論打ち叩くことなどは嚴禁せねばならぬ。腫れ物
に觸るやうな考で育て行へば、斯くしても病
に犯されたり、悪い蟲が付いたりするから心配で
ならぬ。要するに兄のやり方は野蠻的原始的であ
る。動物や植物なら、斯くして弱いものは亡びて
仕舞ふかも知れぬが、人間は間引きをするやうな
ことは道德上出來ることでないから、僕は大に反
對である。といふて居る。

此の兄弟の醫者様の敎養法は全で反對の主義の下
に行はれて居るのである。そこで局外から二者の

結果を半ば推理的に判斷して見ると、身體の健否
は無論前者が壯健である、氣の強いことも前者に
ある。此の中に立つて困らぬ人になるのも前者で
ある。併し人物の高尙なのは後者である。人に尊
敬を受け、人を養ふ位置に立つものは後者にある。
眞の大學を成すものは教育にある。そこで今日の
實際は如何かといふと、上の男の子は同年で兩方
とも中學の同級生であるが、前者の方數番上位に
居るので、後者は常に前者に續行して居る、身體
の方は前者は殆ど頑健無病で後者は時々頭が痛む
といふやうなことである。

さて此の事實は世間にも類のあることであると思
ふが、一家にして多くの兒女を有する吾等の如き
ものは、實際一方の方針で定めることは困難の事
情がある。といふて、五人六人の子供を一々別々の
方針で養育するといふことは出來ぬ話である。果
してどちらにすればよいかといふ疑問が起るので
ある。之れを他人に質すに、或は前の醫者の説を

述べ、或は後者の説をいふ。醫者すら現に此の如しであれば、他人にはこれ以上の妙案は浮ばぬのも無理はないと思ふ。教育上では剛教育軟教育と分けることがあるに似て居るが、養育といふに至つては到底迷はざるを得ないのである。されば縦令父母の身體とか、境遇とか時候、土地とかいふやうな關係の相違があるとも、何れ此の二方針の何れをか採らねばならぬことと思ふが、一般世間ではどちらの養育法が多いか、富豪の子は比較的弱であるといふことは頗る考ふべきことではないか。而し極端に論ずるは宜しからずと思へば、敢て此の事に就いて賢明なる諸君の指教を待つ次第である。

精進甚急なれば、心調を亂れしめ、
精進甚緩ければ心を懈怠ならしむ、

汝當に平等に修習す可し。

心を用ゆること適當ならば道得可きなり。

味ふべき一言 如 柳 子

凡そ何事でも注意して見聞すれば、その事に就て種々なる問題を生じて来るものである。従てよい教訓を得ることもあり悪い影響を受けることもあり、將た幾多の疑問も生じ、他年の懸案の解決することもある、予の最近得た逸談の中に感じたることを一二紹介したいと思ふ。

い 尺八造りの一言

尺八を知らぬ人は直段の高いのが品がよいと思ふ。音のよいことを知らずに、裝飾のよいのを買ふ。何品にもその弊があると思ふが、殊に尺八に就ては甚しい。八圓と三圓とで三圓の方が音のよいことがある。音のよいのは竹がよいのである、尺八によい竹は瘡地に出来る竹である。竹の育ち難いところは、南を受けである礪礪の土地で、竹は斯かる育ち難い瘡地に出来たものでなければよい音を出さぬものである。尺八造りのいつたことはこれ丈けである。されどかゝる困難な土地に育ちたものでなければ音がよくないといふ一言が味ふべきものである。

ろ 商人の眼の向けどころ

支那の或地方では日本の朱肉を歓迎する。そこで盛んに輸出する中に、漸々粗雑なる朱肉を變造するやうになつた。或人が注意して日本の商品の信用に關するから、態々精製したものを輸出すべきに漸々粗製になるのは不都合であるといふと商人の曰く支那人は日本の朱肉を眞に歡迎して居るのではない、朱肉を入れたる硝子の入物が欲しさに買ふのであるから、中味はどんなでもよい。

これ丈けの説をよく／＼考へたれば多くの教訓を含んで居る様で面白いと思ふ。

玩具に就て

農商務省参事官 山脇春樹氏

日本玩具研究會第一回講演會に於て

第一 産業上より見たる玩具

我が國に於ける目下の輸出入總額は一ヶ年約拾億萬圓内外であるが其の輸出品は歐米各國にて多く本來の目的に使用せられず唯だ日本人といふ變つた人種が造つた珍しき品なりとして好奇心より裝飾的に用ひらるゝ位のもので此の頃稍々實用に使用せんとする傾向はあえけれどもまだなかく遺感の次第である。

由來玩具は貿易の魁品たることは今古東西其の規を一にしてをる吾々が一寸異境を旅行するとしても先づ土産に買つて歸るのは玩具である之れ其の土地の人情や風俗が最もよく玩具に表はれておるからであるが若し其の玩具が幼稚であり又は粗製濫造であるならば輸出品の魁が先入主となつて以後の貿易には大變に影響を及ぼす

のである

今や二十餘國と善隣の親を結んで益々貿易を發達せしめねばならぬのに悲しいことには粗製濫造は日本品の冠詞の様になつておる世界中最も信用ある製品を出すのは英國であるが吾人が世界を活歩して意氣の昂るは立派なる商品が先づ世界を活歩した。後である然らば商品の魁たる玩具は最も注意して改良進歩せしめねばならぬ昨年は玩具の輸出總額百四十九萬圓の多きに上り一昨年に比して五十萬圓餘の増加をしてをる此の勢を持續して益々發達せしめねばならぬ

第二 教育上より見たる玩具

實物教育は非常に西洋に於て進歩し殊に英國に於て其の著しきを見る、西洋にては日曜日には全活動を休止して各々好む所に向ふ而して其の多くが如何にして其の日曜日を暮すか之れ面白き問題である

歐米に於ては多數の専門博物館があつて日曜日

には各己れの専攻せる博物館に來りて實物を研究し其の日曜日を暮らすものが多數である而して玩具の如きも日本のものとは大に其の趣きを異にし一つに智職の哲發に留意し所謂虚偽の玩具がない、

獨逸のニコードルヒにては一ヶ年約五千萬圓の金屬玩具を製出する又同國チユリンゲンは山間にて冬時寒氣の爲め業なきに困る有様なりしに今や此の地に於て製産する木製の玩具一ヶ年約三千五百萬圓に達してゐる而して其の獨逸品は多く興味を主とし機械的に活動するものが多い米國に數年前迄三四千萬圓の玩具を輸入しておつたが今頃は反對に三四千萬圓の玩具を輸出しておる其の玩具は一ツに教育を主として其の種數も非常に多様である吾人が學ぶべきは米國の玩具である其の塗料に於ても米國製のものは剥脱することが遅い。

今や歐米に於ては玩具は唯た子供の氣嫌取りに

あらずして大人が用ひて兒童を教育する教育資料なりとみなす様になつた是につき佛國にては月々玩具を配布する玩具供給協會なるものがありて各方面の専門家が月々研究考案をしてゐる本會は丁度之に似て最も有用なる團結であると思ふ今後は共に大に奮勵して大に發達せしめねばならん。

終りに臨んで粗製亂造の玩具を兒童に持たしむるは大人となりて後己れ亦粗製品を出すの素地となり又配色のよろしからざるは後來の工業にも影響すること少からずと信ず、世の父兄たるものは玩具の撰擇に大に留意せんこと望む

平和なる家庭

妻なる者よ、其夫に従ふ可し。此は主(神)にあるものの爲す可き事なり。夫なる者よ、其妻を愛す可し。苦を以て之を待ふ勿れ子たるものよ爾曹すべての事二親に従ふ可し。是れ主の悦び給ふ所なり、父なる者よ、爾曹の子を怒らす勿れ、恐くは其氣餒ふん、饑なる者よ、凡のこゝ肉體につける主人に従ふ可し、人を悦ばせるものの如く、たい眼前の事を務むることなく、誠心を以て神を畏れて従へ。爾曹何事も人に事ふるが如くせず、主に事ふるが如く心より之を行ふ可し。(聖書)

色鉛筆

若 ぎ 父

これは本誌に同情篤き某文學士の筆になつたものであります。ありのまゝの記述の中に一つには幼児發達の記録として、一つには一篇の慈愛文學として深き趣味が充ちあふれて居ります

(編 者)

○八月十九日のお晝の事である。一年九ヶ月になる坊やが、机のほとりに散らしてあつた一枚の判の洋罫紙に、赤と青の振り分けの良鉛筆を振つて、「ジーーーー」（紙聞紙、紙、書籍、雜誌、筆、ペン、鉛筆、硯箱、硯、墨等に通ずる坊や獨特の名詞、語源は「字」なるべし）と言ひながら、裏と表とに濫に線を塗りまわした。坊やが色鉛筆を使ふのは、今日が初めてである。第一の「ジーーーー」で赤が出た。不思議さうに見つめて居る。普通の鉛筆の色と違ふのに驚いたらしい。鉛筆に眼をつけて、暫らく視て居たが、今度は反對の端で「ジーーーー」をやる。忽ち青が威勢よく出る。それか

らしばしの間は青の世界で、やがて又赤になり、又青になり、間には普通の黒の鉛筆も仲間に入る。○この罫紙を手にとつて眺め入つて居るうちに、珍らしく何か書いて見なくなつた。朝からの坊やの出来事を、この罫紙に書き付けて見なくなつた。○元來自分は書いて残して置く事を好まない。日記も嫌である。忘れる程のものなら自由に忘れしまひたい。忘れられないものは獨りでに残つてくれるであらう。しかも年と共に之れがおぼろに綺麗に成るのは、猶更あこがれの思ひを増させこそすれ。

○父の亡くなつた年に、肖像を書齋にかけた事がある。どうも偶像的で符牒的で、忘れともなくする爲めに無理にかけて置くやうな「思ひ出せ、忘れるな、忘れるな」と自分を強迫する爲めにかけて置くやうな、父に對して何とも云へない濟まな氣がして堪へられなくなつた。之れ以來父の姿は額にかけて置かない事にした。

○それが、何故坊やの記事を書いて見たくなつたのか、自分にも分らない。兎に角書いて見やう。

八月十九日

○腸を悪くして居るので、三度ともバンである。食卓の上に置いてあるゴム製の小羊に、自分のパンを食べさせやうとする。今度は自分の持つて居るセルロイドの達摩さんの頭をバンに擦つけて、可憐さうに達摩さんをジャムだらけにする。その内に酒屋の用達の小僧さんが蟬に糸をつけて持つて来てくれる。其蟬にパンを押しつける。しかし傍に居るトーチャンやアーチャン（坊やはカ）の發音の代りにアを用ゐて居る一やヲバチャンには、決してパンをこんな強いはしない。

○トーチャンの胸にとまらせた蟬が、だん／＼這つて背中へ来る。坊やはそれを見て「アブ／＼」と呼ぶ。蟬がトーチャンにオンブしたと云ふのである。それを見て自分も急にオンブしたくなつた

と見えて、どん／＼傍へやつて來たけれども、蟬がとまつて居るので、困つた顔をして立つて居る。

○アーチャンに抱かれたまゝでジューをする（モッコを坊やはジューと云ふ）。忽ち八九歩立ち退いて、障子につかまりながら、顔をしかめて妙な足つきをして居る。よく見ると、或は拇指で蜆を拵へながら、踵で立つたり、或は踵を上げて指先で立つたりして居る。足にジューがついて居るので、それを氣にして逃れやうと云ふのである。

○アーチャンに抱へられ、トーチャンにもたれて遊んで居た坊やが、右の二の腕をおさへて、しきりに「アー／＼」と云つてアーチャンに迫る。見てやると蚊にさされた跡がある。フーチャンが「チョイ／＼と搔いてやると、搔かれて居ながら少さい人さし指でトーチャンの手の甲を軽く搔く。そしてアーチャンとトーチャンとを見較らべてはニコ／＼笑つて居る。

○ジャムをつけたパンを小さく切つて、お皿へ入

れて置く、それを取つて樂しさうに食べる。時々。
——どうかすると取つて食べる毎に——指にジャムがつく。一々そのジャムを拭いて貰はなければ氣が濟まない。食べて居る内、今右の人さし指にジャムがついた。氣に成つて氣に成つて仕方がない。其人さし指を眞直に延ばし、他の指で無格好にパンを握り、アーチャンの方を見ながら、顔をしかめて、「エーン——」。

八月二十日

○叔母ちゃんが御仕事をして居る二階へ伴て行く
と、窓の竹格子の間から、盛に裁縫の道具を抛り出す。先づヘラが亞鉛の廂に落下して、將に雨後の樋に轉げ込まうとして居る。トーチャンは庭へ降りて、ニユーツと手を延ばして其ヘラを取つて、棒の先へつけて差し上げると、キヤツ——と悦んで騒ぐ。今度は二尺ザシを格子の間からやつとの事で出して落さうとする。一寸格子につかへて中々墜落しない。とう／＼窓の眞下に落ちる。下か

らは手が届かない。塀につかかつて取つて坊やに渡す。其爲めにトーチャン兩手と右の脇は眞黒になる。又二尺ザシを落さうとする。今度は後からフーチャンの牽制運動があるので、落さない様な風をしなから、やはり大に落さうとする。とう／＼眞直にトーチャンの耳をかすめて地上に落ちる。○達摩さんの頭に叔母ちゃんの琴の爪をのせて悦んで居る、丁度加藤清正のやうな形になる。しかしそれをもすぐ庭に抛り出す。抛つたから口でべツ／＼とやつて居る。何時何處で誰が唾をしたのを見て眞似をして居るのか、油斷が出来ぬものだと思ふ。

○兩手にセルロイド製の起上り小法師を持つて、將に庭に抛り出さうとして居る。あはやとアーチャンが庭の方から手をかざして留める。くるりと身を翻して、抛らうとした兩手で其まゝ頭をおさへて、ヤーツ——と云つて逃げて行く、やるまいぞ／＼と追つかける。やがでアーチャンの隙を見

て、二つともすさまじい音をたてさせて庭石に叩きつける。そしてアーチャンの顔を見ながら、口をぱいに開いて、バー／＼と云つて笑つて居る。○廊下を急でかけて来てバタリとのめる。あたりに誰も居ない。居るとすぐ泣出すのであるけれども、顔をしかめてあたりを見まわしながら、「アブ／＼」。蓋しアブーとはアブナイの略である。

八月二十一日

○病氣をしてから非常に乳に親むやうになつた。アーチャンにだつこして、しきりにバイを吸つて居る。其傍でトーチャンが有るか無きかのバイで一生懸命に勧誘する。笑を含みながら「ナヨ／＼」とやつて来て、きまり悪さうにだかれて、二たなめばかりして逃げて行く。そしてアーチャンのバイに復舊する。圖に乗つてトーチャンは又悪勧めする。今度もやをらアーチャンのバイを離れてやつて来たけれども、初めトーチャンに向つて直線に進んだ方向が、すぐ左へそれる。更に左に、又

更に左に——とう／＼アーチャンのまわりを一週して、フン／＼と軽く意味ありげに笑ひながら、又アーチャンのふところへ——。

○縁側へ反物をならべて風を入れて居る所へやつて来て、いきなり手近にある一樂か何かを庭に投げ出すとする。トーチャンの注進によつてはせ參じたアーチャンは、先づ他の反物を遠くへ避難させる。其暇を狙つて投げやうとする、アーチャンも去る者、中々隙が無い。一步坊やが引けば、一步アーチャンが進む。アーチャンが庭を背中にして右翼を包むやうにすれば、坊やは笑ひながらクルリと左方に轉開する。押しつ戻しつ、包みつ開きつ。チヨ／＼した足取りと、ゆるい足取りとで、軽いリズムをふみながら、三間も四間もならび進んだが、勝算なしと見て取つたが、力任せに反物を座敷の畳の上にバサリ。○乳母車に乗せて乾香を買ひに行く。昨日の夕方オンブして通りを歩いた時、六歳ばかりの女の子

が、トキ色の着物を着せた人形を抱いて居るのを見て、「アイチャン、ネンネ。アイチャン、ネンネ」と云つて何度も振り返り、遂に其あとを慕つて歩かせられた。アイチャンとは子供の事、ネンネとは繪や彫刻などの子供を意味する。其様子では、人形が欲しくつてたまらないらしく見えた。それで買物をすましてから、六寸ばかりの人形を買つてやつたら、すぐ其人形をトーチチャンに渡して、「アイチャン」と云ふ。つまり「女の子のものは女の子に達せ」とでも云ひたさうな顔つきである。一旦受け取つて、更にそれを乳母車に入れて車を押し始めたら、可哀さうに髪の毛をつまんで抛り出すこと二回。止むを得ずトーチチャンが手に持つて歸る事にする。

○手重能で盛に長火鉢の灰をすくつて、疊へこぼす、鐵瓶へ浴せる。銅鐏へかける。バラリくとやる毎に、煙がバツと立ち登る。手重能を取り上げると、有り合せたスプーンで一増烈しくやる。

手も足もつけられない、傍へ近寄る事も出来ない。正に人天に勝つの概がある。アーチャンが嘆じて、「これをはーッて見物して居るには、餘程な勇氣がいります」。ふと思ひついて、いつか銚子の海岸で取つて來た綺麗な砂を出してやつて遊ばせて、一寸安心して居たら、大變。いつの間にかそれを口へ入れて顔をしかめて、べっ／＼とやつて居る。脱脂綿で口を掃除するので、アーチャンは大汗になる。坊やは大泣きをする、トーチチャンは確かにウロ／＼して居たらしい。

八月二十二日

○朝、トーチチャンは出かけるのである。看物を着換へた様子を見て、すぐ坊やはアーチャンにオンブしやうとする。勢の定まつたのを見て、アーチャンも外出と観念する。トーチチャンが包みを拵へたりして居る間に、アーチャンは「ブー」を持つていらつしやい」と坊やに云ひつける。チヨコノと歩いて行つたが、何處でさがして來たか、自分

の帽子を兩手で頭にのせて、變な冠り方をして歸つて来る。オンブして玄關まで出ると、しきりにブー／＼と云ふ「坊やはブーを冠つたんぢやないの。」と云ふけれども中々聞かない。見るとトーチヤンの帽子を指してブー／＼と云つて居るのである。其心づけにあづかつた帽子を嬉しく冠つて、やがてお揃ひで電車まで行く。トーチヤンだけ分れて電車に乗つたので、變な顔をして「トーチヤン／＼」と呼んで、お出で／＼をして居る。アーチヤンは狂熱的の勇氣を躍して一間ばかり電車と競争する、キヤツ／＼と聲をあげ、體をゆすり、アーチヤンの肩を叩いて悦びに悦ぶ。其うち電車とぐん／＼離れてしまふので、坊やの顔は急に曇つて来る。アーチヤンは身を翻へし路を轉じて、何かしきりに坊やに話かけながら、坊やの氣をまさけらさうとして居るらしい、其姿が小さく夢の國のやうに電車の中から見える。歸つてから聞くと、すぐ次の電車がやつて來たら、忽ち聲をあげて「ト

ーチヤン／＼」と呼びかけたさうである。この電車にもトーチヤンが乗つて居るものと信じて居るらしい。

○誰が教へたのか、鼻をつまんで「ミン／＼」と云ふと、つまつたやうな鼻音が旨く出るので、蟬の泣聲に一寸似て来る。坊やは始終自分の鼻や、トーチヤンやアーチヤンの鼻をつまんで、ミン／＼をやつて居る、人形の鼻、假面の鼻はまだしもである。机の上に立たせたら、釣りランプのねぢに手を延ばして、心をねぢ上げたり引込ませたりして、「ミン／＼」をやつて居る。拇指と人さし指とでつまむものは、總て坊やにはミン／＼である。今度はこの新發明のミン／＼にも飽きて、石油壺に兩手をかけて、目茶苦茶に動かす。油が漣立つて、さら／＼とゆれて、稻妻のやうな波が立ち騒ぐ。それを見て、ザー／＼と云ふ。ザーとは湯槽の湯、お湯に入る時の玩具や道具、海、河、水たまりなどに通ずる坊やの言語である。今夜か

ら又ザ一の仲間が一つ殖ゑる。

○九時頃アーチャンと床に入る。何か氣にいらな
い事でもあるのか、それとも睡くなつてものが分
らなくなつたのか、座つたり、起上つたり、寢轉
んだりして、いろいろ文句を云ふ。ブー／＼（ブ
ーとは帽子の外に、呑むお湯をも意味する）と云
つて見たり、ウマとパンとを一緒にしてマン／＼
と云つたりして、中々寢つかない。そこでトーチ
ヤンが離れから出張して、お尻の邊を轉くビシャ
／＼打つて、「ネンネツ／＼」と威嚇する。忽ちア
ーチャンにしがみついて、目をまぢ／＼させて、
パイを吸つて居たが、すぐすや／＼と寢入つてし
まふ。今更のやうに小言がよく利く事を感心する。
三時頃に目をさまして。ひどく怒つて泣き出す。
寢つく時に傍に居た筈のトーチャンが居ないので、
で、怒つて泣いて居るのかしらと思つたので、ア
ーチャンはしきりに離れのトーチャンを呼ぶ。ト
ーチャンは何事が起つたのかと、びつくりして目

を醒まして、眞暗な部屋を手さぐりにさまよひ出
る。忽ち机の角で膝頭を打つ、障子にしたゝか煩
を打ちつける。つぶさに艱難を嘗めて、やつとの
事で坊やの隣に侍べる。坊や／＼と慰める積で
やさしく聲をかけたなら、一屬ひどう怒り出して、
足をバタ／＼やつて、盛にトーチャンを踏む蹴る。
寢る時の析檻を思ひ出したものらしい。案に相違
して、さん／＼面目を失つて、ほう／＼の體で逃
げのびる。離れの廊下に、外して立てかけてあつ
た障子が四枚ばかり、暗がりになさまじい音をた
て、倒れる。トーチャンを追拂つたら、すぐ寢つ
いたさうである。

八月二十三日

○お晝頃、郵便を出したり、買物をしたりするつ
いでに、坊やを乳母車に乗せてつれて行く。車に
はホロをかけ、トーチャンは洋傘をさして行く。
絶えず小聲で何か獨り言を云ひながら、非常な御
機嫌である。菓子屋の前に車が留つたら、チラリ

と何か目に入つたと見えて、車の中で立ち上らうとする。急いで注文をしてすぐ店を出て来て、絶えず車を動かして注意を他の物事に向かせやうとする、やがて買物が済んで、車を押して歸途につく。十間も来ると急に泣き出す。車を急がせたり、いろ／＼な事を言ひかけたりしても、どうしても聞かぬ。何か注意をすれば、益、怒つてそり返つて泣く。この時坊やの帽子は眞深になる。家までは猶五六丁はある、進退こゝに谷まつたので、止むを得ず日蔭に車を入れて、坊やを抱き起すと、有らん限りの聲を出して赤くなつて怒つて泣く、體は弓なりにそり返へる。どう云ふわけか、兩手で帽子の縁をつかんで、ぐんぐんと引く、帽子はだん／＼めり込んで、あわやと思ふ間もなく鼻が隠れてしまふ。猶深く帽子を引かうともかく、あまり大きくもない帽子である、鼻も口も隠れてしまつては大變である。事こゝに至つてはトーチヤンも多少夢中の氣味、急いで坊やの兩手を退けや

うとしても、しつかりおさへて中々離さぬ。もう口まで来かゝつて居る、力を入れて坊やの左の手をグイと引く、離れる、左の手で再び帽子をつかまない内にと、突嗟、右の手をもグイと引く、引いた手を閃めかして急いで帽子を取る。水色の繻子の裏地は汗にぬれて中々脱けないのを、無理やりに乳母車の中にながぐり捨てる。扱て横抱きにしていろ／＼なだめて見たけれども、素よりかう成つてはトーチヤシの勢力範圍のものではない。ひたすら怒り泣いて、車には乗らず、近處には知り合ひもなし、そろ／＼人も立ちかゝる。泣くのを構はず急いでつれて歸るより、どうしても外に道はない。左の手に坊やをかゝへ、右の手に洋傘を持ち乍ら乳母車を押して、無二無三に人通りをかけ抜ける。乳母車の方向轉換の鈍さを巧みに制御して、日中と云ひても人の行來の多い通りを急ぐには、非常に右の手に注意と筋肉の力とを集めなければならぬ。町の兩側の家々では、アレ／＼

と云つて居るらしい。泣きつゝけの坊やは、そり返へり／＼してづるつこける爲めに、着物は胸まで捲くれ上る。時々右の手の管轄の車と洋傘とを離して、坊やの體をすり上げるけれども、益々泣いてそり返へるので、發達の遲鈍な左の手一つでは、素より支へ切れる筈がない、すぐに又する下がつて遣る瀬がない。トーチャンの態度もかう成つては最早やシドロモドロである。思ひついたやうに洋傘を車の中に投げ込んで、少し右の手が樂になる。小さい頭を日に曝らしては大變である、洋傘はさす手がない、帽子には少なからず懲りて居る。頭をグイと自分の顔に引よせて、トーチャンの帽子のツパで蔭を拵へてやる。途中で二三の路行く人に同情されて、車を押しましやうかと云はれたけれども、却つてこの方が早く家に着くらしいので、好意を有りがたく受けて御断りして急に急ぐ。一つには辻褄の合はない人と一緒に走つて、騒動の輪廓を異様に大きくするにも忍びな

かつたからである。やつとの事で家が見える。四軒手前のミルクホールに車を押しやつて、扱て兩手でかゝへて家へ飛び込む。坊やを入口に居た叔母ちやんに渡して、途中の光景を歴々と目の前にくり返へしながら、心痛と慚愧と落着の安心とに心がつれてミルク屋へ引返へす。ミルク屋の前では近所の子供が十人ばかり車を圍んで群がつて、今彼等が見た窮迫した緊張した光景を物語つて居る。疲勞し切つた自分の顔を見て口々に「どうしました?」「大變ねー!」「どうしたの?」「泣いて居て?」と可愛い慰問をしてくれる。心配して歸つたら、アーチャンに抱かれてバイの最中である。トーチャンの顔を見たら、きまり惡さうに笑つてもぢ／＼しながら傍へ寄つて来る。今日の事件も發端はトーチャンの買物について、何か氣にさわつたか、不平な事が有つたらしい。體には何等の異状もない。全く坊やに濟まなかつた。

玩具は如何に 選擇すべきか

高市次郎

玩具を用ふるに三通りある其の一つは大人が玩具を用ひて兒童を遊ばせる時と、大人と兒童とが互に玩具によりて遊ぶ場合と兒童のみが玩具を用ふる場合とである

第一 兒童が大人の用ふる玩具によりて遊ぶ時代は多くは乳兒期で直觀作用による音色等を用ひ唯だ無意告の働動を與ふるのみである故に此の場合には形は可成單純にして色は原色を主とし音は餘り強からざるものを撰ぶがよい、がらくなどにも随分手のこんだ絹物などを用ひたる大人には立派なものがあるが是等は何等の意味もないのである又此の場合には危険なもので構はない從て硝子片で造つた風鈴などでもよい是は音が靜で又趣きのあるものである風車な

三二

どは吹いて見せるものであるから壞れ易いものでも構はない

第二 大人と兒童とが玩具によりて共に遊ぶ玩具はせんまい付の活動的のものが最もよい、一般に此の頃はブリキ製のものは危険であるせんまいものは直に壞れると云つて全く玩具界よりは是等活動的の觀察玩具を取り除かんとするものがあるが是は大なる誤りである成る程玩具は實用的の機械の様に頑丈に出來ては居ない併しながら無理をせずに充分構造を承知して用ふればしかく壞れるものではない、之を大事に取り扱つて漸次兒童と共に慣れしめば兒童も又法外の無理なことをするものではない、此の邊が大に訓練上必要な處で所謂玩具を用ひて兒童を教育すると云ふ處である幼稚園などは丁度此の場合に適した機會も多々ある殊に四五才位の時期は最も活動的のものを好むものであるから此の時代には夫れ相當のものを撰んで使用する時に注

意せねばならぬむやみに玩具の危険を恐れて其の範圍を非常に狭めるものがあるが之は注意せねばならぬ、西洋人の子供は小さいのに打物を持つておるのを見ることが屢々ある本年も輕井澤の礦で小さい子が随分危険らしい熊手や金屬の鋤の類を持つて平氣で遊んでゐた、人を溺れしむる水に入らなければ水練は出来ぬ

第三 玩具を持つて兒童が遊ぶには大人の監督のある場合とない場合とがある、幼稚園は常に後の場合で此の時の玩具が兒童に對し最も有效な場合で實驗觀察玩具若しく玩弄用、製作用、勤勞用の玩具を選ばねばならぬ此の時は年齢も自然に長じた時であるが玩具は却而危険のないものを選ぶがよい而して自由に用ひしめて少し位壊しても構はず充分に使用せしめねばならぬ監督もなく獨で玩具を扱ふ時には最も丈夫で危険のない變化の多いものを選ばなければならぬ是が實際に心身を鍛練する有力なものである

以上は用ふる場合によりての撰擇法を略述したのであるが余の考ふる處によれば時には兒童の性格と反對の玩具を與ふ必要もあると思ふ假へば數學的の頭のない子は大概推理的思考玩具を嫌ふけれども如斯兒童には却而推理的のものが必要である又家庭によると面倒臭いことをする玩具は兒童をいぢけさす粗放活達の玩具ならざるべからずとて或は鐵砲劍の如きものゝみを與へる併し膽大心には古來よりの戒で大活動の後には又沈靜なる玩具を要すると思ふ故に兒童を玩具店に導きて其の慾するものゝみを買ひ與ふも亦決して上乘ではない、併し全く兒童の意見を度外視して大人の時度せる玩具のみを兒童に與ふも又弊害の多き場合がある此の邊は所謂玩具撰擇の最も困難なる處で大に注意せねばならぬ乳母書生などに一任してむやみに玩具を購ふは寒心の至りである

○幼兒預所に就て

倉 橋 生

此の間關西に遊んで、神戸の幼兒保育所を參觀した。忙しい間で、充分詳細に觀ることは出来なかつたが、それでも感想の上に得る所は少なくなかつた。

すべて世の事業は何でもそうであるが、殊に斯ういふ種類の事業は必ず二つの方面から見なければならぬ。一つは「人」の方面から見ることである。一つは「金」の方面から見ることである。「人」の方面から見れば神戸の保育所（余の參觀したのは宇治野と八幡の二ヶ所であつた）は、最も幸福のものといつてよからう。主任の方を始め、他の方々が皆よく己を棄て、可憐な貧兒の爲に盡して居られる。「金」は比較的得られ易いものである。「人」は得られないとなつたら到底得られないものであ

る。神戸の保育所は此の點に於て第一の成功といはなければなるまい。正直にいへば、余は保育所に行く途中、たいそこに居る子供等のことだけ考へて、保母諸君のことは餘り考へて居なかつた。然るに足一と度び保育所に入つてからは、先づ保母諸君を見て感じてしまつた。余は普通の幼稚園に於て、保母諸君が、受持幼兒の粗忽した汚れものを始末し、洗濯せらるゝのを見て、保育室以外、遊園以外に、幼兒教育の貴さを感じて居たが、貧兒保育所を見ては、上には上のあることを思はずには居られなかつた。之れが義務で出来ようかと思つた。之れが體裁で出来ようかと思つた。併し、此の「人」を見るにつけて、「金」の點の不足が一層感ぜられざるを得なかつた。之れは單に神戸保育所の爲めのみならず。實に遺憾のことである。切角此の「人」を得て、もう少しどうかすることは出来まいものかと思つた。凡そ斯かる設備を訪ふた時は、施與する食物を調べて見るが大

切であるが、時間を急いだので、それは出来なかつた。次には種々の設備に就て注意すべきであるが、此の設備たるや、先づ大體に於て（或る範圍内に於ては保母の奨勵にもよるが）經費の問題である。經費の見す／＼不充分的なことを知つて居ては、その設備の不充分を云々するには忍びない。況んや此の「人」に對して氣の毒である。余の所感を露骨にいはいしめれば、神戸の保育所は保育所の保育所といふ風に世から見られて居るらしい處がある。之れは飛んでもない間違である。神戸の保育所は神戸の社會的所有物である。神戸といふ社會が總が／＼で世話をすべきものである。此の理を一層よく神戸の人々に分つて貰ひ度いと思つた。そうすればあれだけのものを、もう少し理想的にするのは大した困難のことではない。無いものを新に興すのは困難である。殊に「人」を得るに於て困難である。折角あれだけ出来て居るものを、何とか一層の改良發達を希望にたえぬのである。

二

此の感想の序に、少しく幼兒預所の問題に就て考へて見度いと思ふ。但し吳々もお斷りして置くのは一般論をするのであるといふことである。神戸の保育所について批評をするのではない。幼兒預所といふ語には別に確とした定義としてはない。從つて色々の意味に用ゐられて居るが、余は之れを佛蘭西の「クレツヘ」といふ意味に用ゐ度いと思ふ。即ち、家庭に於て、両親の外稼の爲に、養育の出来難い子供を晝間預る所といふ意味に用ゐ度い。そうして、孤兒院、感化院、養育院、及び普通の幼稚園と區別して置き度い。幼兒預所に預るものは貧家の幼兒である。第一に必要なことは清潔である。貧は不潔の母とは、どうも免れ難い事實である。而して更に、其の不潔が貧人の上に及ぼす精神上、身體上の悪影響は實に恐るべきものである。貧人に一日でも清潔なる場所を與へることは、大いなる慈善である。其の

清潔が彼等の生活の上に多少の習慣を興ふ様に
なれば、それこそ大いなる教育である。貧兒は不
精者だといはれる。成程そうでもあらう。併し彼
等は第一不潔を不潔と感し得ないのである。不潔
の中に生れて、不潔の中に育てられて、不潔が常
性となるのは已むを得ない。そこで、清潔の必要
や愉快を説いて聞かせたとて分らない。清潔を経
験させるに限る。幼兒預所に於ける清潔問題は單
に其の場の衛生問題のみでなく、一層大いなる意
味に於て貧兒教育の第一要件である。
次に大切なことは衛生上の設備である。衛生上の
設備不十分で貧兒の預り所を企てようとするのは
文明上の大冒険である。元來幼兒預所に對する一
派の反對論者が最も有力なる論としていふ處は、
貧兒間の惡疾傳染にある。一體普通の幼稚園に於
ても、専門醫の検査が年に何度といふ風なのは、
舊式極まる遣り方である。況んや貧兒の集合場に
於ては、此の身體検査が一層も百層も嚴密且つ親

切でなければならぬ。そうして検査した以上は、
それに應ずる丈の處置をとらなければならぬ。
即刻にとらなければならぬ。内科的諸疾患に於て
もそうである。皮膚病科的のものに於て殊にそう
である。特に眼科諸病は最も注意を要する。今日
參觀して斯ういふ子供の居るのを見て質問すると
昨日検査をした。明日處置する筈であるといふ風
のことは屢々遭遇することであるが、そんな悠長
なことであつてはならぬ。
第三に大切なことは家庭殊に母親との連絡であ
る。之れを一般の教育に於て皆必要のことである
が、貧兒の預所に於ては更に、又別種の意味に
於て之れが緊要である、即ち母親を教育するとい
ふことに於て最も必要である。晝間幼兒預所のい
ろ／＼の骨折が夕から朝までの家庭でこわされて
仕舞ふのは常に殘念なことである。清潔の習慣で
も、衛生上の手當でも、貧家の母を教ゆるに幼兒
預所程適當な處はない。理屈ではなしに、お前

さんの此の子を、此の通りにといつて教へ得るのである。育児上の實物教育が出来るのである。勿論幼児預所の直接の任務は幼児の爲である。併しその社會的存在の自然的要求からいへば、貧人の家庭を教育するといふことを是非受持たせられるのである。又、それを併せ行はなければ直接の目的をも充分に遂げ得られない。それには目幾度といふ母の會も至極く有効である。併し、それと相俟つて、幼児をつれて来る朝、つれに來る夕、その零細の時間を巧に利用することを忘れてはならぬ。親達は忙しいことであらうが、五分早くつれて來させるのである。つれて歸る時五分ゆつくりさせるのである。而して此の十分の時間に、保姆は手と口とで彼等を教育するのである。幼児を預るだけで容易の忙しさではない。その上にそんなことまでと思はるゝ方もあるかも知れぬが、それはそうでない。彼等を教へるといつても何も講義をするのではない。たいつれて來て、たいつれて

歸る彼等の目を一寸開けてやるのである。手を一寸働かさせてやるのである。耳を一寸傾けさせてやるのである。一日十分、一ヶ月には五時間になる。必ずしも今夜は母の會だといつて、特別な準備をしたり、母親の方の用を差繰らせたりしないでも、五時間といふ大した教育が一寸した、心づかいで出来る。幼児が幼児預り所へ來て、その清潔な中に一日居て歸つて、我家の不潔が子供にも氣になつて母の耳へ注意する處へ、母親は母親が朝夕、清潔な預所を見て成る程と目から我點するといふ様になれば、其の家庭は乏しいなりに段々と清潔にならざるを得ないのである。之れはほんの途上の感想に過ぎぬ。大切な幼児預所の多くの問題に就ては、他日を期して再び述べ度ひと思ふ。

○幼稚園の戶外運動器具

之れは大阪で聞いた話である。同市の某幼稚園で、

或る朝遊園のブランコが根から折れて、其の爲に二人の幼児が死んだといふことである。そして其の原因は専門家の調査によつて、白蟻の害によること明白になつたのである。私は此の不幸なる話を傳へて、其の當局の人々に重ねて心苦しい思ひをさせるに忍びないのである。泥んや之れを責任問題として云々しようなどとするのでは毫もない。寧ろ、死んだ幼児の不幸、其親御達の不幸と共に其の幼稚園當局者の方々の不幸を御同察するものである。併し、此の不幸なる事實は吾等に重大なる教訓を與へるものなることを感じて、茲に念の爲一言せざるを得ないのである。それは、此の悲惨事を我々よそごとと思ふことはならぬことである。白蟻に浸蝕された柱は、ペンキの爲に外面からは分らなかつたさうである。又白蟻はさう何處にも居るものではなからう。併し、吾々の一寸した注意の不行届の爲に、氣はついて居ても例の手不精の爲に、運動器具の被損を其のまゝにし

て置いて、大切な幼児に怪我をさせることはないか。元來、幼稚園を參觀して、私の處には之れ之れの運動器具が備つて居るといふ御自慢を聞くことが屢々あるが、吾々の併せて伺ひ度いのは、その澤山の運動器具に、どれだけの管理が届いて居るかといふことである。それを併せ聞かない中は、早速感服することは出来ない。いくら鐵で出来て居ても、いくら念入りに出来て居ても、どんな過ちがないとはいへぬ。朝一寸調べて置くに越したことはあるまい。又それが大した勞でもあるまい。釘一本ゆるんで居ても、大事になる。前夜の雨にどこかいたんで居るかも知れない。前夜の風に、どこかはづれて居るかも知れない。元氣のいゝ子供が、いきなり取附いて運動する前に、豫め一寸調べて置くことは是非必要のことである。こんなことはいふまでもない實行せられて居ることと思ふのであるが、大切な子供の爲の老婆心から申すのである。